発見！おごおり遺産

No.22 六地蔵

市内の石像シリーズ第２弾は六地蔵です。六角柱の各面に地蔵を彫り込む珍しいこの石像には、どのような意味があるのでしょうか。

佐野古大神宮の２基の六地蔵

三沢光明寺の六地蔵

地蔵菩薩とは、仏教の始祖である釈迦が亡くなり、56億７千万年後に弥勒菩薩が次の仏として現れるまでの間、釈迦にかわって人々を地獄の苦しみから救済する存在です。平安時代後期の末法思想の広がりに伴い、人々の信仰を集めるようになりました。

市内には、この地蔵菩薩が６体集まって祭られる「六地蔵」信仰が見られます。これにはどのような意味があるのでしょうか。

仏教では、人は生前の行為の善悪によって、死後に地獄・畜生・餓鬼・修羅・人・天という六道の境涯を輪廻転生すると言われます。そして、六地蔵とは、そのそれぞれに、人々の救済のために配される地蔵（檀陀・宝印・宝珠・持地・除蓋障・日光）のことで、日本独自の信仰です。

三沢の光明寺境内には、六角柱状の石があり、その各面に浮彫で地蔵が彫られています。上に載る笠も下の基礎石も六角形で、石幢という石塔の一種です。基礎石には文政13年（１８３０）の銘があることから、江戸時代後期に造られたことが分かります。

寺福童の禅福寺境内のお堂の中にも六地蔵が祭られています。ここでは、六体が別々の石像ですが、銘に「奉建立六地蔵菩薩」とあることから、最初から六地蔵として造られたようです。同じく銘に享保15年（１７３０）の年号があり、３００年近い歴史を持つことが分かります。

佐野古大神宮の境内には、２基の六地蔵があります。お堂の外にあるものは、きれいな六角柱状の石の各面に地蔵が彫られ、お堂の中にあるものは、像を隔てる区画のない丸みを帯びた石となっています。

神社の境内には、佐野古福田家の祖先である福田美濃守種次の石塔婆と記念碑があります。石塔婆はもとは別の場所にありましたが、江戸時代に書かれた『筑後国史』にその記載があり、そこには「其傍ニ古石佛アリ、六地蔵也」とあることから、この２基の六地蔵との関係が推測されます。

死後の安寧を願う気持ちはいつの時代も変わりません。実際に現地を訪れ、その思いに触れてみませんか。

問合せ先　文化財課☎７５・７５５５

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと